（付　　篇）

斎宮跡の土師器

昭和60年3月20日

三重県斎宮跡調査事務所

斎宮で出土する飛鳥～平安時代の土器は、90%以上が土師器で、おもな器種には、杯、皿、椀、高杯、鉢、盤、壺、鍋、甕、甑、カマドなどがある。ここでは、これらのうち、最も出土量が多く、しかも比較的保存状態の良好な杯・皿類の形態、調整法、色調、胎土の変化に注目し、これをメルクマールとして、良好な一括資料とみなし得る各遺構出土土器の編年を試みたい。

なお、その実年代については、目下、斎宮では、木簡の出土は1点もなく、また、墨書土器や文献上の記事から例証でき得るようなものも数少ないため、共伴する猿投窯、美濃窯などの須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器や、瀬戸窯、常滑窯、渥美窯などの山茶椀の年代観を参考とする一方、平城京や平安京など先進地域における研究成果との対比によるところが大きい。

土師器の時期区分については、従来奈良時代を前半、後半の2時期に、平安時代を初頭、前半、中葉、後半、末葉の5時期に分類してきたが、今回新たに奈良時代中期を設け、平安時代前半と後半をそれぞれ前Ⅰ期、前Ⅱ期、後Ⅰ期、後Ⅱ期の2時期に細分した。また、後半、末葉といったあいまいな語句をやめ、すべて期という呼称を用いることにした。従って奈良時代は、前期、中期、後期の3期に、平安時代は初期、前Ⅰ期、前Ⅱ期、中期、後Ⅰ期、後Ⅱ期、末期の7期に分かれる。以下各期の土師器の様相について述べることにする。

(1) 飛鳥時代の土師器

奈良時代以前に遡る土器が宮域西部の古里、中垣内、東裏地区などで検出される竪穴住

居や土坑からわずかではあるが出土している。おもな器種には、土師器杯・皿・椀・甕・台付杯・台付皿・蓋・高杯・把手付壺、須恵器杯蓋・無台杯身などがある。しかし出土土器の大半は、土師器甕類であり、他のものは量的に少なく、保存状態も悪いため、この時期の明確な土師器杯・皿類の特徴を把握するまでには至っていない。むしろ供膳土器では、杯よりも径12cm前後で暗褐色や茶褐色を呈する粗製の椀が主体的である。これは、比較的胎土の良い明茶褐色や赤褐色を呈する杯・皿に比べ、胎土に砂粒を多く含み、しばしば粘土ひも巻き上げ痕跡をとどめる通称“いなか風椀”と呼んでいる一群である。甕は、胴の長い長甕と、体部がずんぐりとした球形の小形甕、口径の割に器高の低く、体部が扁平な鍋に近い甕がある。器面の調整は、外面を細かいハケメ調整し、内面は体部上半を横方向のハケメ、下半を縦にヘラケズリするものが一般的である。また口縁端部に面をつくるものもみられる。

この時期の標式土器として、ＳＢ1615（第30次調査）・ＳＸ2735(第45次調査)・ＳＫ1255（第27次調査）・ＳＫ2120（第36次調査）出土のものがある。共伴する須恵器では、杯蓋に返りのあるものが見られる点、無台杯身が２種類に分化していない点などから猿投窯編年の岩崎41号窯式に相当するものと考えられ、ＳＢ1615出土土器はこの中でも一番古手に属するものと考えられる。

(2) 奈良時代の土師器

○前期の土師器　古里地区から宮域中央部まで確認されている大溝ＳＤ170 出土土器、第33次調査で検出の井戸ＳＥ1800埋土最上層出土土器、第49次調査で検出の土坑ＳＫ3000出土土器を標式とする。共伴する須恵器は猿投窯編年の高蔵寺２号窯式に相当するものと思われる。

土師器杯・皿とも平らな底部にやや内弯気味に立ち上がる口縁部から成り、口縁端部は丸く終わるものと、内側に丸く肥厚するものがある。いずれも明茶褐色や赤褐色を呈する。なおＳＥ1800とＳＫ3000出土の土師器杯・皿の法量を比較してみると大形の皿は、口径19.5cm～22.5cm、深さ2.4cm～3.1cmの間におさまり、底部をヘラケズリし口縁部を横なでするｂ手法で調整されるなど両者ともほぼ共通しているが、杯では、ＳＥ1800出土のものがほとんど口縁部内面に放射状暗文、底部に螺線暗文を施し、ｂ手法で調整され、中には外面をヘラミガキするものが見られるのに対し、ＳＫ3000出土の杯は、暗文を施すものは少なく底部のヘラケズリが口縁部下半まで及ぶものが多い。また法量においてもＳＥ1800出土の杯は口径12.4cm～16.6cm、器高3.0cm～5.2cm、ＳＫ3000出土の杯は、口径15.2cm～18.6cm、器高3.0cm～4.2cmと、ＳＫ3000の杯の方が全体的に口径が大きく、その割に器高は低い。この傾向は、粗製の椀についてもあてはまる。このほかＳＫ3000出土の皿の中に口径14.6cm～15.8cm、器高２cm前後の小形の皿が認められる点、ＳＥ1800出土の須恵器杯蓋に返りの名残りが認められるものがあるなど、奈良時代前期の中でもＳＥ1800出土土器の方が古く、ＳＫ3000出土土器の方が新しい要素をもっているものと思われる。甕は前代に引

き続き、法量、器面の調整とも大きな差は認められない。

○中期の土師器　第21－1次調査で検出の土坑ＳＫ1098、第35次調査で検出の土坑ＳＫ1970出土土器を標式とする。いずれもトレンチ調査であったため、完掘できなかったが、多量の土師器、須恵器が出土している。特にＳＫ1098からは、整理箱で25箱分の出土量があり、須恵器杯・盤・椀・蓋・高杯・甕、土師器杯・皿・盤・椀・蓋・高杯・甕等、比較的豊富な器種が揃っている。共伴する須恵器は、猿投窯編年の岩崎25号窯式に相当するものと思われる。また、須恵器杯蓋の中に紐部が頂部平坦で断面逆台形状を呈するものがあり、これは平城宮第Ⅲ段階に見られる特徴的な蓋とされているものである。

土師器杯は、前代同様口径13.6㎝～19.8㎝、器高2.3㎝～4.5㎝の様々の法量のものが認められるが、口径に対する器高の割合が前代の杯に比べ全体的にやや減じるようである。器面の調整は底部から口縁部下半にかけヘラケズリするもののほか、外面全面をヘラケズリするｃ手法調整のものも若干みられる。土師器皿は、前代同様ｂ手法が主体的で、法量における大きな差はない。中には、底部内面に螺線暗文を施すものや、外面をヘラミガキするものが認められるが量的に少ない。

○後期の土師器　第28次調査で検出の土坑ＳＫ1291出土土器を標式とする。共伴する須恵器は鳴海32号窯式から折戸10号窯式の古い段階に相当するものと思われる。

土師器杯は、この時期から底部と口縁部の境が明瞭になり、口縁部が直線的に外へ開くものや、口縁部が外反し、端部はやや内弯気味となるものが現われる。また、法量では口径14㎝前後のものと18㎝前後のものに大小の区別が明確化してくる。器面の調整は口縁部を横なでし、底部のみヘラケズリするｂ手法である。ちょうど平安時代に盛行する杯に型式的につながるその崩芽段階のものであると考えられる。

土師器皿は口径17㎝～18㎝、器高2.0㎝～2.5㎝のものが多く、前代までのように口径20㎝を超えるものは、ほとんど見られなくなる。口縁部の形態は、前代までの皿のように内弯気味に立ち上がるものと、新たに、杯の口縁部形態に対応して、外反しさらに端部がやや内弯するものが現われる。器面の調整は口縁部を横なでし、底部は指先でなでつけるｅ手法である。以上のように、杯の調整法や皿の形態に奈良時代的なものを残しながらも、杯の形態や杯・皿の法量ではむしろ平安時代的であり、ちょうど杯・皿が大きく変化するその過渡的な段階のものであろうと思われる。

(3)　平安時代の土師器

○初期の土師器　第34次調査の土坑ＳＫ1445出土土器を標式とする。出土土器の大半は土師器杯・皿類であり、少量の土師器高杯・甕・鍋・鉢・甑、須恵器杯・高盤・蓋が伴う。このほか小形円面硯や「大」「万」「萬」「寮□」「年平」「秋」など10点の墨書土器もある。

共伴する須恵器は猿投窯編年の折戸10号窯式（井ヶ谷78号窯式も含める）の範疇でとらえられる。

土師器杯は、前代のＳＫ1291にその萌芽が見られたように口縁部が外反する平安時代的なタイプの杯（Ａタイプ）と、底径が小さく長めの口縁部が外方へほぼまっすぐに開く椀に近いタイプのもの（Ｂタイプ）と、口縁部が内弯気味に立ち上がる奈良時代的なタイプ（Ｃタイプ）の３者がある。杯の大部分は前の２者で、両者はほぼ同数である。Ａタイプ、Ｂタイプの杯とも口径が12.4㎝～12.8㎝、13.0㎝～13.4㎝、15㎝以上の３つに分類でき法量の規格化が進んだものと思われる。Ｂタイプの杯には、口径11㎝以下のものもある。Ｃタイプの杯は口径16.0㎝～18.6㎝と大形で、内面に間隔の粗い放射状暗文や螺線暗文を施すものが多い。暗文はＢタイプ杯にもごく稀ではあるが、口縁部に放射状暗文や格子目暗文が認められるものがある。器面の調整は、Ａタイプ、Ｂタイプはすべて底部外面を指先でなでつけ、口縁部を横なでするｅ手法で、Ｃタイプはｅ手法のほか、ｂ手法やｃ手法も若干見られる。台付杯はこのＣタイプの杯にのみ高台が付けられる。

土師器皿も杯と同様にＡタイプの杯と同形態の口縁部を有する皿（Ａタイプ）、底部と口縁部との境が明瞭でなく断面弓状となり、口縁端部の上方に平坦な面をつくるもの（Ｂタイプ）、平坦な底部に内弯気味に立ちあがる口縁部からなる奈良時代的な皿（Ｃタイプ）の３者がある。Ａタイプの皿は口径16㎝～17㎝、器高 2.0㎝～2.4㎝、Ｂタイプの皿は口径15.6㎝～17.6㎝、器高2.2㎝～2.4㎝と両者の法量は似かよっており、器面の調整も、ｂ手法で調整される口径24㎝のＡタイプの大形皿１点を除き、他はすべてｅ手法である。Ｃタイプの皿は、口径16.2㎝～17.6㎝、器高2.4㎝～2.8㎝のものと口径21㎝前後のものがあり、前者はｅ手法で調整され、後者はｂ手法で調整される。間隔の粗い放射状暗文や螺線暗文の認められるものも多い。奈良時代の名残りをとどめているものと思われる。

土師器甕・鍋・鉢の外面の器面調整はこの時期には、確実に体部上半を縦方向にハケメを施し、体部下半から底部をヘラケズリするものが認められ、以後この調整の仕方が主流を占めるようになる。

このほか高杯脚部が最も長大化するのもこの時期のようである。

○前Ｉ期の土師器　第20次調査で検出の土坑ＳＫ1045出土土器、第44次調査で検出の土坑ＳＫ1424出土土器を標式とする。いずれも多量の土師器杯・皿のほか、様々な器種の須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器などの供膳土器が伴っており、その出土状況は、祭祀に関係した土器の一括廃棄と見なし得るものである。共伴する灰釉陶器は、猿投窯編年の黒笹14号窯式に相当する。

土師器杯・皿はこの時期から形態、調整法において奈良時代的な要素をもつＣタイプのものが消え、それぞれ前代のＳＫ1445で見られたＡタイプ、Ｂタイプのもので構成されるようになる。また器面の調整もｂ手法やｃ手法は見られなくなり、すべてｅ手法に統一される。杯の法量は前代のものとほぼ変わらず、Ａタイプ、Ｂタイプの杯とも口径の大きさにより少なくとも４つに分類可能である。また比較的大形品であったＣタイプの杯はＢタイプの杯に同化されたものと考えられるのでＢタイプの杯の中に量的に多くはないが口径17㎝前後の大形品も見られる。一方皿の法量はＡタイプの皿が口径16㎝～17㎝と前代のもの

と変化はないが、Bタイプの皿は口径14cm前後のものが主流で、前代に比べやや縮少傾向にある。また皿の中に口径20cmを超える大形品は、この時期から見られなくなる。

○前II期の土師器　第51次調査で検出の土坑SK3127出土土器、第44次調査で検出の土坑SK2650出土土器を標式とする。共伴する灰釉陶器は猿投窯編年の黒笹90号窯式に相当する。なおSK3127出土の灰釉陶器は黒笹90号窯式と黒笹14号窯式の新しい段階のものが混在しており、土師器杯・皿も前I期に近いものである。従って本時期はさらに少なくとも2時期には、細分可能である。SK2650出土土器は、祭祀に伴う一括廃棄の土器と考えられ、下表のごとく多量の土師器杯・皿のほかあらゆる種類の土器が網羅されており、この時期の基本資料となっている。

土師器杯・皿は前代同様AタイプとBタイプがあるが、器壁は4mm前後と全体的にやや薄く仕上げられ色調は淡褐色や橙褐色を呈するものが多い。またAタイプの杯は、口縁部が大きく外反するのみとなり、口縁端部の内弯は見られない。調整の省略化が進んだものと思われる。Bタイプの杯も前代のものに比べ外傾度が大きい。

器面の調整は、Aタイプ、Bタイプの杯・皿ともすべてe手法である。口縁部外面の横なでの範囲は、SK3127出土のものでは器高の$\frac{2}{3}$ほどまで及んでいるのに対し、SK2650出土のものは、器高の約$\frac{1}{2}$までしか及んでおらず、SK3127出土の杯の方が明らかに古い要素をもっている。杯の口径はAタイプのもので14cm前後、16cm前後の2つに、Bタイプのものでは13.5cm前後、15cm前後、17cmを超えるものの3つに大別され、口径12cm～13cmの小形品はなくなり、これまで細分傾向にあった法量がこの時期を境として次第にまとまる傾向にある。この点について詳しくは論じ得ないが、黒笹90号窯式の灰釉陶器が普及するにおよんで、土師器・須恵器を主体とした食膳形態から新しい食膳形態に変化したことと対応するのではないかと考えられる。

土師器皿も同様にAタイプのもので口径15.5cm前後、Bタイプのもので口径14cm～15cmにまとまりつつあり、前I期のものに比べて全体に法量が縮小傾向にある。暗文は、ごくわずかではあるがBタイプの杯やこれに高台をつけた台付杯と大部分の黒色土器椀に認められる。

土師器甕は球形の体部と小さく外反する短い口縁部から成り、口縁端部は上方につまみ

SK2650出土土器の構成

土師器					須恵器					黒色土器			灰釉陶器		緑釉陶器		
杯・皿		約15,000	15,056個 (98.8%)		杯	高台無 8	23	41個 (0.3%)		椀 A 14	26個 (0.2%)		椀 32	62個 (0.4%)	椀 21	53個 (0.3%)
高杯		9				高台有 15				椀 B 1			皿 12		稜椀 6	
壺	胴長 6	23			皿		3			皿 1			段皿 8		二彩椀 6	
	胴丸 22				杯蓋	紐無 4	5			小瓶 1			耳皿 1		皿 11	
鉢	高台無 13	18				紐有 1				壺 3			長頸壺 5		段皿 4	
	高台有 5				壺蓋		1			壺蓋 1			短頸壺 1		稜皿 2	
盤		1			高杯		1			風字硯 1			小瓶 2		耳皿 1	
					甕		5			甕 4			壺蓋 1		唾壺 1	
					鉢		3								浄瓶 1	

総数 15,238個

あげられ、やや肥厚する。器高22.4cmを測るやや胴の長い甕は、奈良時代から続く長甕の最末形式と考えられる。

○中期の土師器　折戸53号窯式に相当する灰釉陶器が共伴する土師器をこの時期のものと考えているが、斎宮では、この時期に相当する遺構・遺物が極端に少なく、標式となり得る良好な一括資料は今のところ見つかっていない。敢えてあげるならば第51次調査の井戸ＳＥ3134出土土器がこの時期に相当する。土師器杯は口径13.0cm～14.4cm、器高 2.2cm～3.6cmで、前代のものに比べさらに縮小化は進み、大形のＢタイプの杯を除くとＡ、Ｂ両タイプの区別が不明瞭となる。また口縁部の外反も弱く横なでの範囲もせまくなり、白っぽい色調を呈する杯・皿も見られる。

なお斎宮外ではあるがＳＫ2650出土土器に直接続くと考えられる良好な一括資料が多気郡多気町カウジデン遺跡の溝ＳＤ14から出土している。ここでは口径13.0cm～14.8cmの明褐色を呈する土師器杯、口径19.8cm、器高 4.5cmの大形で深いＢタイプの杯、口径14cm～15cmのＡタイプの皿がある。また１点ではあるが、杯に放射状暗文と螺線暗文を施すものがみられ、暗文の下限を一応この時期ぐらいに考えている。灰釉陶器杯・皿は、体部下半から底部をヘラケズリしたのち高台を貼りつけ、灰釉をツケガケするものであるが、皿にはハケヌリするものも若干認められている。従って灰釉陶器は折戸53号窯式の中でも古い段階に属するものと思われる。ＳＥ3134出土の美濃窯産と思われる灰釉陶器椀・皿も体部下半から底部をヘラケズリし高台を貼りつけ、灰釉をツケガケするものであるところから、ＳＥ3134出土土器は、ＳＤ14出土土器とほぼ同時期に位置付けられよう。

○後Ｉ期の土師器　第31－４次調査で検出の井戸ＳＥ2000出土土器を標式とする。共伴する灰釉陶器の中に大形の深椀があり、猿投窯編年の東山72号窯式に相当するものと思われる。

土師器杯は、法量の縮小化が増々進み、口径13cm～14cmとこれより一回り小さい口径10cm～12cmのものがあり、杯・皿の区別が不明瞭となる。口径10cm～12cmの杯はむしろ小皿と呼ぶべきものであろう。またＳＥ3134まで系統のたどれた皿は、この時点で完全に姿を消している。胎土は、まだ比較的良好で、黄褐色や白味がかった褐色を呈するものが多い。一方、この時期から新しくロクロ製土師器が登場する。おもな器種に底部に糸切り痕をとどめる椀（口径14cm前後）、小皿（口径9.4cm～11.4cm）、そしてこの小皿に高台をつけた台付小皿があり、非ロクロ製のものに比べ胎土は緻密で、作りはていねいである。このほか非ロクロ製の台付椀（口径14cm～16cm）や浅い皿部に高い高台のつく台付皿、台付小皿も前代にはほとんど見られなかったものである。なお台付椀は、カウジデン遺跡のＳＤ14出土土器の中に大形で深い椀部に低い高台のつくものがあり、台付椀の上限はここまで遡るものと考えている。

土師器甕は、球形の体部にくの字形に曲がる口縁部がつき、口縁端部は内側へ折り曲げられてやや肥厚する。体部外面の調整は、上半部を縦方向に全面ハケメを施すもの、間隔を置いてハケメを施すもの、ハケメを施さないものがあり、調整が簡略化されつつある。

体部下半はヘラケズリされるのが通例である。なお、体部上半部を間隔を置いてハケメを施す例は、既に前代のＳＤ14出土土器の中に見られる。

○後Ⅱ期の土師器　第32次調査の土坑ＳＫ1730出土土器、第20次調査の土坑ＳＫ1074出土土器を標式とする。共伴する灰釉陶器は、猿投窯編年の百代寺窯式に相当するものと考えている。

土師器杯・皿にはロクロ製と非ロクロ製があり、ロクロ製の占める割合が前代に比べ増加している。ロクロ製の土師器には、小皿・台付小皿・台付大皿のほか擬高台風に底部が糸切りされた大小の皿、最末型式の灰釉椀を模倣したと考えられる椀があり、非ロクロ製の土師器には、杯・小皿・台付皿・台付小皿・大形で深い杯がある。胎土は、ロクロ製のものに比べ、砂粒が多く、器壁も４㎜～６㎜と前代のものに比べやや厚手である。色調は両者とも白味を帯びた淡茶褐色を呈するものが多い。

この時期におよんで、口縁部が外反するＡタイプの杯は完全に姿を消し、従来の杯の系統をひくと考えられるものでも、器高が減じて浅いものは皿と見なされ、杯・皿の区別がいよいよ困難な状況である。なお杯（皿）の中には、底部の厚さに比べて口縁部が若干肥厚し、口縁端部のみ横なでされる新しいタイプの杯（皿）も見られ、このタイプが次のＳＤ3052出土の皿につながっていくものである。土師器甕は、全体をうかがえるものは出土していないが体部外面のハケメはこの時期には施されないものと思われる。

○末期の土師器　第50次調査で検出の溝ＳＤ3052出土土器を標式とする。共伴する山茶椀は瀬戸窯山茶椀編年のⅡ段階第４型式に相当するものと思われる。

ロクロ製土師器には、皿・小皿・台付小皿があり、非ロクロ製の皿・小皿と法量がほぼ一致する。皿は口径15㎝前後、器高２㎝～４㎝、小皿は口径９㎝前後、器高 1.5㎝前後である。台付小皿は口径９㎝、器高４㎝で、皿の部分は小皿に比べて浅く、高台部分は、口径の割に高い。ロクロ製の土師器は、淡い茶褐色を呈するものが多く、胎土には細砂を含む。一方、非ロクロ製の土師器杯・皿は全て口縁部のみを横なでするもので、横なでの下端部分が突出するように肥厚するのがこの時期の皿の特徴である。白っぽい褐色ないしは茶褐色を呈し、胎土に細砂を含む。またしばしば粘土紐巻上げ痕跡の見られるものもある。

(4)　まとめ

以上のように斎宮で出土する飛鳥時代から平安時代にかけての土師器の様相、特に杯・皿の変遷について11期に区分し概観してきた。そこで各期の年代観について各地で想定されている土器編年の年代観と対比しながら、私案を示しまとめとしたい。

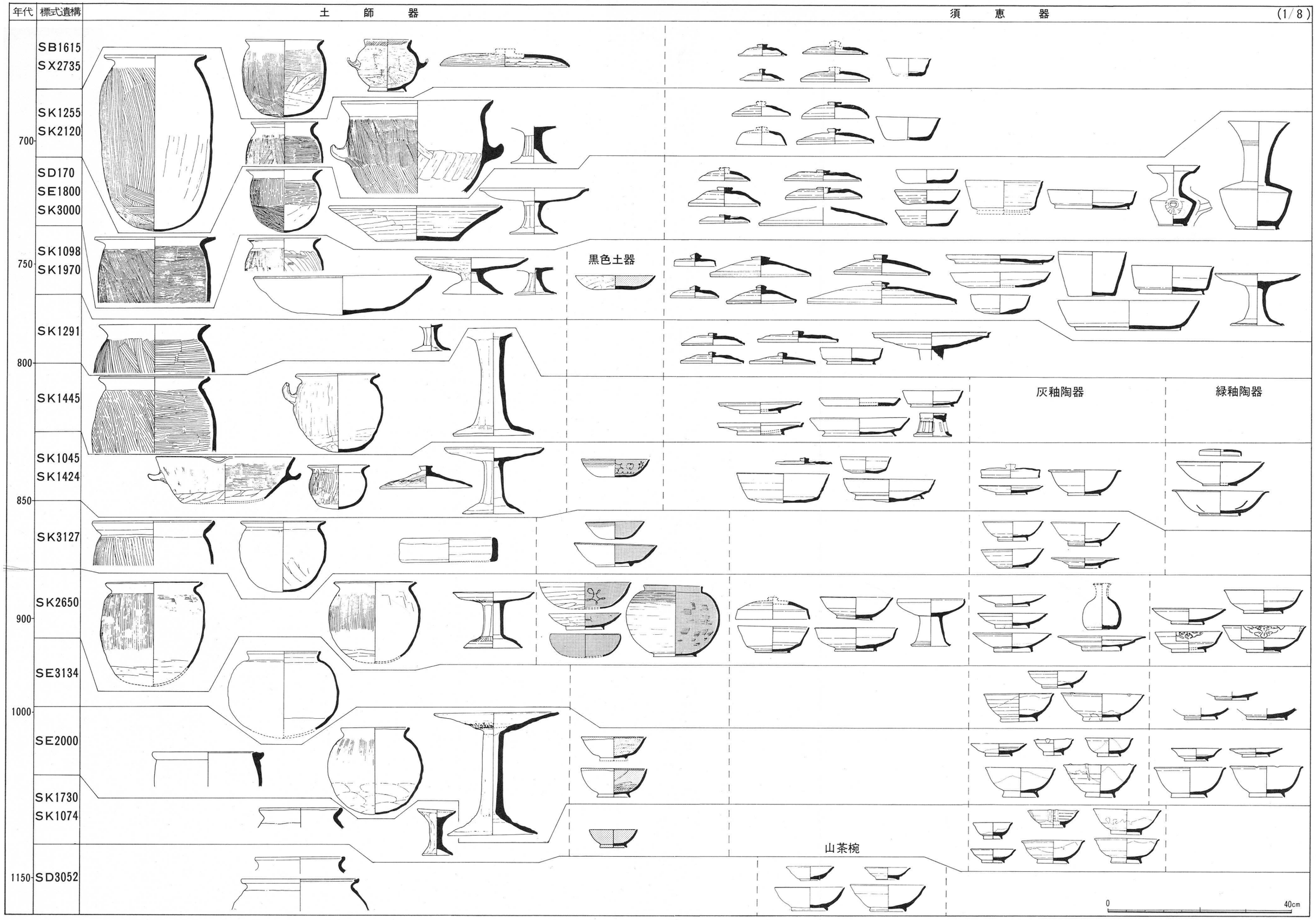
まず奈良時代以前のＳＢ1615・ＳＸ2735・ＳＫ1255・ＳＫ2120出土土器は７世紀後半に奈良時代では前期としたＳＤ170・ＳＥ1800・ＳＫ3000を８世紀前半、中期のＳＫ1098・ＳＫ1970を８世紀中頃に、後期のＳＫ1291は８世紀後半頃を考えている。そして平安時代では、初期としたＳＫ1445を８世紀末～９世紀初頭に、前Ⅰ期としたＳＫ1045・ＳＫ1424は、黒笹14号窯式の灰釉陶器を共伴し猿投窯編年ではこれを９世紀後半に位置付けているが、

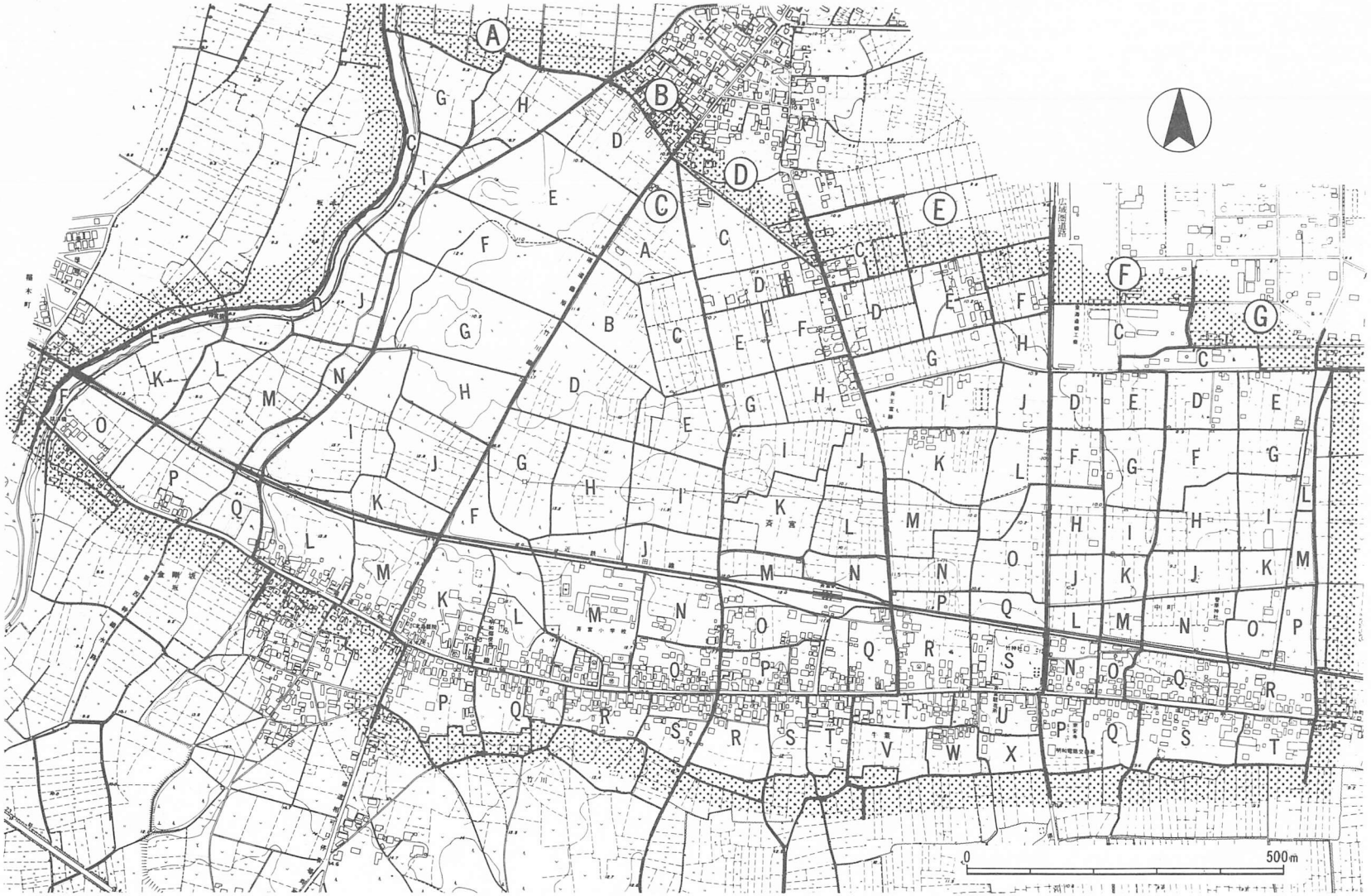
土師器杯・皿は、ＳＫ1445のものと形式的に連続するものと考えられ、またＳＫ1445とＳＫ1045・ＳＫ1424の間を埋める土器も見つかっていないところから、時期は若干遡り９世紀前半～９世紀中頃を考えている。前Ⅱ期としたＳＫ3127・ＳＫ2650は、いずれも黒笹90号窯式の灰釉陶器を共伴するが、先述のように灰釉陶器や土師器杯・皿の形態からＳＫ3127→ＳＫ2650の順が考えられ、２時期に細分が可能である。時期的には、９世紀後半～10世紀初頭頃を考えている。これに続く中期のＳＥ3134は、10世紀前半～10世紀中頃に、東山72号窯式の灰釉陶器を共伴する平安時代後Ⅰ期としたＳＥ2000は、猿投窯編年から11世紀前半に位置付けられる。このように考えてくると折戸53号窯式の新しい段階に相当する10世紀後半が斎宮では空白となる。斎王制度そのものは断絶はないのに、この時期を埋める遺物がほとんどないというのは、いかに考えればよいのであろう。ＳＥ2000とほぼ同時期と考えられる第８－４次調査（Ⅰトレンチ）で検出の土坑ＳＫ190出土土器はすべて火災にあった一括土器であるところから、仮りにこれが天元４年(981）に斎宮寮雑舎13宇焼けるという日本紀略の記事に対応するならば、ＳＥ2000は11世紀を遡る可能性も十分あり得ると考えられる。次の平安時代後Ⅱ期としたＳＥ1730・ＳＫ1074は百代寺窯式に相当する灰釉陶器を共伴しており、11世紀後半に、平安時代末期としたＳＤ3052は12世紀中頃を考えている。

参考文献

「斎宮跡発掘調査概報Ⅰ」1979
　ＳＫ1045・ＳＫ1074・ＳＫ1098
「三重県斎宮跡調査事務所年報1979」　1980
　ＳＢ1255・ＳＫ1291・ＳＫ1424・ＳＫ1445・ＳＫ1452・ＳＢ1615
「三重県斎宮跡調査事務所年報1980」　1981
　ＳＫ1445・ＳＢ1615・ＳＫ1730・ＳＥ1800・ＳＫ1970・ＳＥ2000
「三重県斎宮跡調査事務所年報1981」　1982
　ＳＫ2120
「三重県斎宮跡調査事務所年報1982」　1983
　ＳＫ1424・ＳＫ2650・ＳＫ2735
「三重県斎宮跡調査事務所年報1983」　1984
　ＳＤ170・ＳＫ3000・ＳＤ3052・ＳＫ3127・ＳＫ3134
『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』　愛知県教育委員会1983
藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ』　瀬戸市歴史民俗資料館1983

年代
標式遺構
土　師　器
(1/4)
SB1615
SX2735
SK1255
SK2120
700
SD170
SE1800
SK3000
SK1098
SK1970
750
SK1291
800
SK1445
SK1045
SK1424
850
SK3127
SK2650
900
SE3134
1000
SE2000
ロクロ製
SK1730
SK1074
1150
SD3052
0
20cm

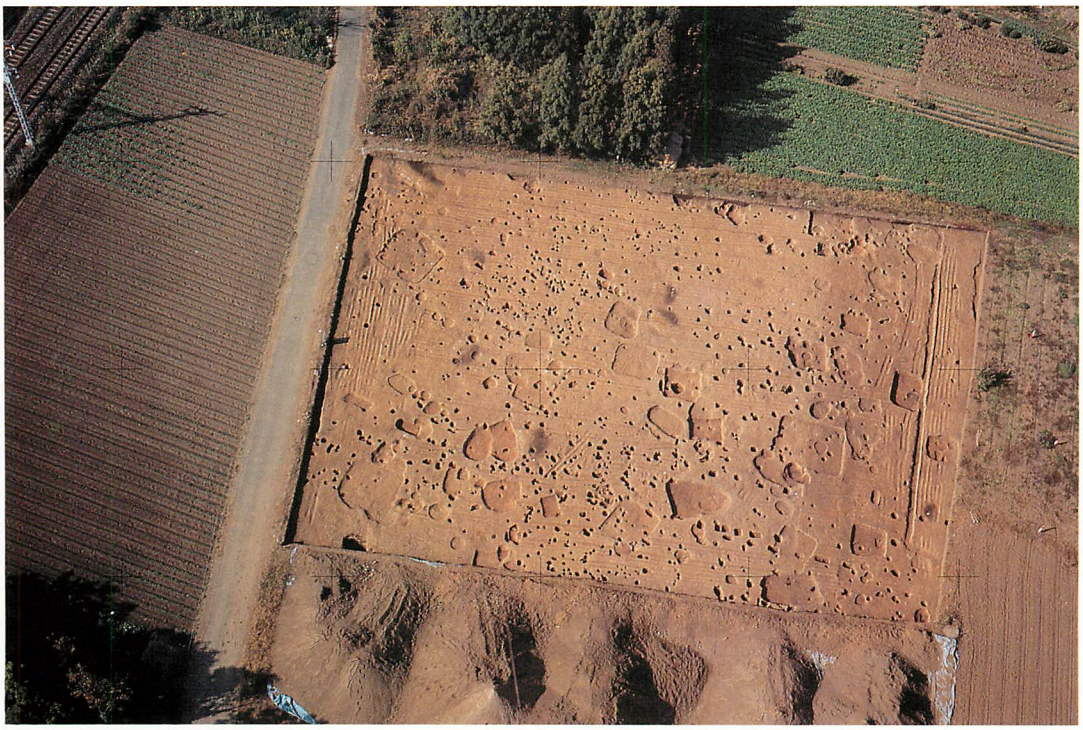

年代
標式遺構
土師器
須恵器
(1/8)
SB1615
SX2735
SK1255
SK2120
SD170
SE1800
SK3000
SK1098
SK1970
SK1291
SK1445
SK1045
SK1424
SK3127
SK2650
SE3134
SE2000
SK1730
SK1074
SD3052
700
750
800
850
900
1000
1150
黒色土器
灰釉陶器
緑釉陶器
山茶椀
0
40cm



斎宮跡地区表示

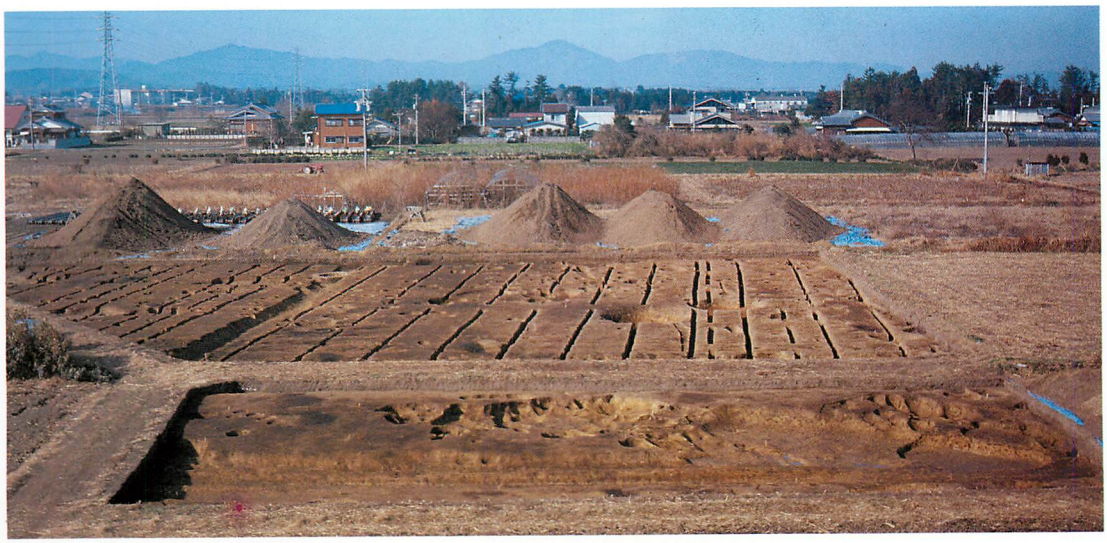
図　　版

第55次調査全景（南西から）



第56次調査全景（東から）

第57次調査全景（上空から）



第57次調査全景（東から）